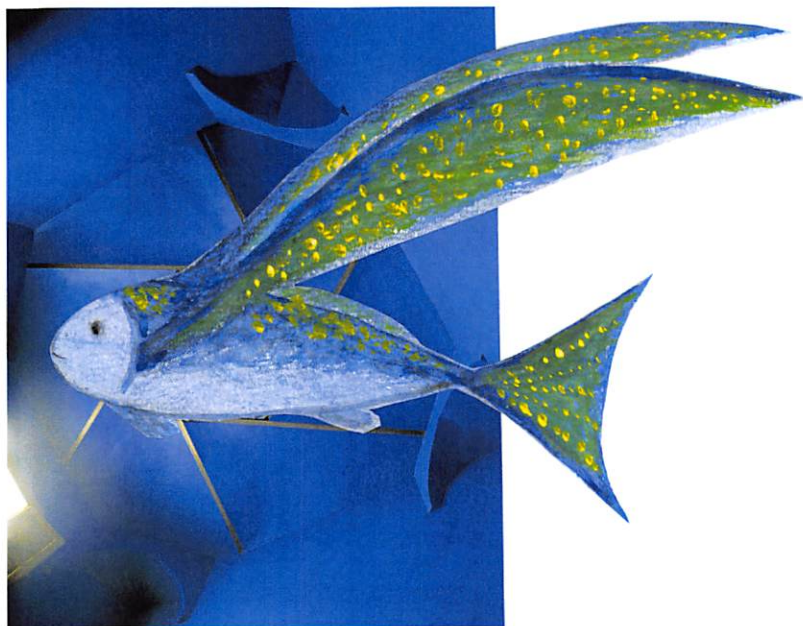


# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2017.11



平成29年11月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻第11号 No.714

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇一七年二月号(通卷七一四号)

◇今月の二十首詠……カタフイ

仲西正子 2

■作品 A

牧 雄彦・松浦禎子他 4

A 牧 栄美他 28

B 松平正守他 60

C 森本ちずる他 76

A 駒崎五恵他 92

■オリーブ集

真庭郁子他 52

◇今月の二人

六戸千佳子・木村静子 48

■特集・短歌における美

—— (責任編集) 檜垣美保子 15

闇の美

言葉の流れ

読者を信じること

「美しい」から「美」へ

〈資料〉短歌が追求する美について

檜垣美保子

私と短歌との出会い (183)

植田和子 51

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 58

■歌壇月旦

評論賞の課題から

木村文子 81

■九月号作品批評

A……朝井恭子・もとむらしげと

松本多摩子・中村志津

B……野玉 幸・濱田みや子

C……川崎百合枝・倉島とよ子

オリーブ集……今村叶子・養学登志子

今月の二人・作品評

久我田鶴子 50

最近の歌誌より

〔編集部〕 75

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## カタブイ

仲西 正子

昭和二十三年生まれ。  
沖縄の会所属。

出荷前検査も済みと添えられて福島の桃ほほえみて来る

指先で剥きて丸ごと桃を食むこれささやかな贅沢をする

桃太郎のばさまが両手で掬い取る桃おもいみる姿つややか

この島に武器魔物マシケンが居ります御出おいでください桃太郎様

いくつもの波消しブロック落とされて辺野古いびつの海の歪いびつな姿

四万五千の県民大会うねる波ジュゴンのためにも辺野古ブルーを

風は止み熱気漂うもうこれはカタブイが来る空の明暗

\*カタブイ…片降り・片しぐれ。片方は晴れていながら、片方で降る夏の雨。

カタブイの雨脚速し月桃の青葉がすぐに光を弾く

唐・大和・アメリカ世ありこれの世も明暗分けてカタブイの島

しんしんと闇夜にあらずクマゼミの羽化の始まる真夜中の庭

背を割りて生まるる力こえたてず枝をゆらさず蝉は陽を待つ

精密な空蝉なるも眼のあたり朝の光に輝きており

地中にて長く孤独に眠り来し蝉生まれ出て木に集いなく

南カーチーベ風吹けばトネリコの花こぼれ見とれておりぬ蝉しぐれ止む

眠られぬ夜には起きて含みしよ妙薬はこれ泡盛「瑞穂」

泡盛と青梅の精の睦み合い梅酒なるまで眠らせておく

再びの風の盆へと心急くとり夜風と音色と手と手

山脈を抜けて「特急ひだ三号」越中八尾へ近づきてゆく

肉声のおわら風の盆の唄を坂道に待つ夜の諏訪町

こんこんと水走りゆく路地裏にかすかに聞こゆ風の盆唄

# 作品 A

牧 雄彦 いのち

止々呂美はみどり濃き峡暗れわたる空をそがひに病院は建つ  
敗戦のかの夏のごとぎんぎんと日の差す病院兄が臥せる  
歩むことかなはぬ細き脚伸ばしひねもす兄は何をおもふや  
誤嚥性肺炎いくたび肺白く機能低下を医師は吾に告ぐ  
余野川の流れ見下ろす部屋に臥す兄のいのちの細りゆくなり  
やせ果てて息苦しいと言ふ兄の顔に手を振り病室を去る  
やまひ篤き兄の臥せるる病院の夕雲映る窓を見上げつ

松浦 禎子 牛に引かれて

水漬くかばねその上の海わたりゆくマングロープの根はおらばぬか  
この海の七十年前に思い馳する手立てなけれど心におもふ  
遠浅の由布島までをゆられゆくアジア水牛のお気に召すまま  
おとなしくわれらを引きゆく水牛車あゆめる跡の砂地かがやく  
乙女牛頭上にブーゲンビリアのせ竹富町ゆくわがもの顔に  
わたくしがある夜ひとりで飲むための泡盛「八重山」四十三度  
沖繩戦ついに聞かざる島めぐり今日お別れの安里屋ユンタ

松永 智子 ひぐらし

ひぐらしのこゑさかりなり楠一木みどりのふかし川風に立つ  
仰ぎみる楠の一木あはあはと流るる雲あり逝く夏のいろ  
来む夏のこの楠大樹の蟬しぐれともにし聞かむ生きるよおとうと  
おのが愚を愚としようべなひみてあれば楠の大樹のひぐらしのこゑ  
ことしのみどりに楠の木ひぐらしの声にしまみれいまさかりなる  
身のうちの染まらむまでに仰ぎたり楠一木の夏終るらし  
川の辺の楠の一本ひぐらしの聲絶えはてたりこの夏のゆく

三浦 好博 余り風

向かうにもフレコンバッグが積まれるる忘れ去られしやうな静けさ  
只今の放射線量五マイクロ窓閉め通る墓参への道  
田畑の跡思はせて丈高き草の起伏の常磐道を行く  
目薬が目に入らない嗚呼われは眼鏡掛けてることさへ忘る  
永田町よりはマシとふ認知症テスト通過す免許証ここ  
マンホール出でて電柱登りゆく工夫は直ぐに羽化を遂げなむ  
猛暑とふ盛夏なれども半島の町に極楽の余り風ふく

宮本靖彦

妻の入院

・ 茨

もとむらしげと

八月十五日

・ 柴

文月尽スパーに西瓜の一切れを買ひて妻とのデザートとする  
妻の手術待つ間をすこす控室盂蘭盆の日の冷房さむし  
退院の妻迎へにゆく道すがち遊び心をふとも覚ゆる  
もう少し買へばよかつた。シャッターに「廃業」の文字見知り八百屋に  
地図になき木陰に出あふ炎熱の励みの散歩ゆるゆる行けば  
雨戸すこし開け換気ファン点けたれば朝風蟬声夏の入りくる  
四十度のデリーの夏も陰涼し三十五度の今日耐へ難し

三好聖三

夢の通い路

・ 伊

くさはらを瑞雨が走り抜けてゆく涼をあたりに降り撒きながら  
朝々の登校児童の賑わいを八時の時報と決めて起きたり  
人に会うことを忌避して幾日か二階の隅の奈落に住まう  
角刈りの菅谷規矩雄が笑っている都立大学解放学校のなか  
少しずつ言葉が軽くなってゆくだんだん死へと近づいてゆく  
畑にて死にたるわれの肉を喰う奇つて集つて貪る猫は  
酷熱のなかにも秋はあらわれて精霊蛸蛉をしきりに飛ばす

御代田澄江

カジノ伝聞

・ 茨

首相には見えをらぬらし大阪文化歴史忽ちキャンブラーのコロニー  
浪花にカジノ誰を儲けさすキャンブルの依存者見込み作る診療所  
雇傭創出謳ひ文句にえげつなからむ大阪にカジノテーマパークは  
わが家にもロボット掃除機入り来ぬ置き位置直すにロボ語で抗議  
丁寧モードで掃除しますとロボの掃除絨毯ふかふか甦ること  
ロボ掃除機ベットの如く使ふ息子今日は自が部屋今日は亡夫の書斎  
亡き夫の五年忌祭祀終へし後活けたる薔薇は未来を指向さす

八乙女由朗

飛驒下

・ 柴

疎開せし東京の伯母が挙げし声身に残りいて耳朶に迫れる  
B29百五十機がグアムより飛びきてわれらの学校を焼きぬ  
被弾する命の危うさ嘯みしめて「昭和と戦争」のビデオ取り出す  
長雨に領域広げし青苔は手に負い難し追わずに済ます  
白露なればテレビアンテナ渡り鳴く山鳩の声しみらとなりて  
妻の言いも食にこだわる事ばかり今日の法事の鰻重を食う  
ゆるやかに過ごさん時ぞ育て来し庭の木の枝の間隔削きおり

山下雅子

樺並木

・ 習

東へ駅前通り緩やかにけやき並木は町のシンボル  
蝉声のみなざるけやき夜となれば椋鳥万の啼となりぬ  
鬱蒼たる夏のけやきを格好の啼となせり椋鳥の大群  
満腹の椋鳥の群れ夜となれば啼に喧し蕨を散らせり  
発砲音光の照射もなんのその椋鳥は夜な夜な町の害鳥  
ばっさりと伐られ無骨をさらす樹々夏のけやきの宿命ならん  
四季おりおり豊けき風情に魅かれ行くけやき並木は安らぎの道

横田敏子 晩夏 ・福

この夏の空はどこかを病んでいて流した涙かこの長雨は  
長雨となりし八月海へ行く約束とうとう流れてしまふ  
少し柔くなりきし桃をそっと剥くあわたしのようだ夏の夕ぐれ  
夕風がかすかに秋を匂わせてわたしの庭にとんぼ来ていて  
座ぶとんの夏のカバーを洗いたり今年夏は訪う人少なく  
夏茶わん、ガラスの金魚、夏の靴片付け始めん虫鳴き始む  
久々の青空ふうせん飛んで行く 眞子様婚約会見始まる

吉内尚彦 永祿の火事 ・浜

永祿の火事にも耐えて生き延びし柵の根の深きを思う  
柵の古木刺しせ円き葉に日吉神社の薫風に舞う  
セシウムを撒き散らかしてこの国の人の居る場所狭まりゆくか  
竹の子や薯は猪草や木の新芽は鹿にたいらげられたり  
若者は独房みたいなマンシヨンの十一階に逃れてゆくか  
また熊が出没せりとう地方紙のニュース驚くこともなく見る  
ミサイルの飛び来るなかれ湿原のみどりに止まる八丁とんぼ

吉永惟昭 カンナの花 ・熊

赤い血が伝うカンナのこの炎 今年も燃えて八・一五  
炎天下重大放送聞きし昼突き崩れしかカンナ咲く庭  
べっ座りカンナの根っ子血吹くとも両の拳は叩き続けし  
飢えに耐え奇蹟の高度成長を享受して過ぐこの齡まで  
戦災後水害・地震・大津波・台風禍にも一緒のカンナ  
くそ暑き 首相あいさつ 目は外のカンナの花にヒバクシャ妻は  
解体か隣の母屋背伸びして覗くカンナの花が秋づく

朝井恭子 昼月 ・森

海近き運河に映る昼月のおぼろなる影水面に白し  
片言を覚えし幼「オチュキサマ」と小さき指に満月を差す  
暑さと夕べを散歩の犬達は互みに距離をさりげなく置く  
美しき女に曳かれて散歩する犬幸せな貌をしており  
仲の良き飼主同士の立ち話を二匹の犬は地に伏して待つ  
母よりの形見の扇子煮き込めてありし香も失せ思ひ出になる  
母の齢いつしか越えていよにも「終活」の文字身近になりぬ

飯田勤 新天地 ・む

二十余年共に暮しし男孫独立せむと家を出て行く  
幼き日とんぼ追ひかけはしやきたる無邪気な姿ふと浮かびくる  
わが郷里の伊豆の海辺で遊びたるよろこびの声耳に残れり  
見つけたる住居は駅に程近き新築マンシヨン快適なりと  
マンシヨンは通勤便利な中野駅歩いて僅かとお聞きとおどろく  
速き日の我が通ひし高校も下宿も友もみな中野なり  
新天地求めてスタートしたる孫えにしの深き地ですこやかに

磯田ひさ子 梨 ・森

下ぶくれのコリンキーといふ南瓜浅き黄の色ひかひかさせて  
薄切りの短冊にしてコリンキーのさきさき感を夏のサラダに  
コリンキー噛みつつ思ふトンキーといふ「かわいそうなぞう」の話  
霞ヶ浦のかなたをいつも眺めぬき高校帰りの土浦駅に  
ゆふぐれの霞ヶ浦につきつきと湧きしよ白き帆を張りし船  
長雨に祟らるる夏つねよりも遅れて届く「にいはりの梨」  
ふるさとのいまだ青みの残る梨まづは仏にお供へ申す



市原志郎

病床七

・萬

奥田陽子

花吹雪

・羊

ほおずきの色づく庭となりけり知らぬ間に夏過ぎて行くなり  
 埼玉県民として高校野球見ておりぬ角膜移植せし眼にて  
 子の運転する自動車に乗りて来し病院の前今日人多きかな  
 診察を待つ間妻と息子と居て幸せなりきしばらくの間  
 声かけてくるるを待ちて居る所ここは病院の二階の廊下  
 うとうとせしは待合室の片隅に私の今日の一日がある  
 世の中には病みたる人のかく多し病院廊下に人あまた居て

市原やよひ

公園

・萬

小野雅子

思ひ出す

・羊

水たまりにムギワラトンボ影映し夏なき夏の終わりを告ぐる  
 公園にトランペット響きいてふいに横切る黒揚羽蝶  
 ゆりの木を揺さ振る程の蟬の声公園は今人影のなく  
 公園のトランペットは切れぎれに鳴ってる木槿の花咲くあたり  
 花桃の実は樹下に散らばりて朽ち始めたり夏過ぎ行かんとす  
 知らぬ間にオンパツタ手の甲に白粉花を片づける時  
 庭隅のほおずきの赤目立ち来て幼き我のよみがえり来る

奥田清和

学窓

・大

菊岡栄子

竜巻情報

・漣

とわ女史を迎へむとしておほ寺のかまど櫃にぬかづきし香川進は  
 大会を終へたちまちに姿消すいづくにいますや香川代表  
 めしひゆくわれをかばひて大文字に心こめたる友の行間  
 いくさ終へ七十余年会はざるに文通はせて共に卒寿ぞ  
 栃木なる山わの君の友情を支へに生きむめしひたる今  
 芭蕉の月日は過客の謂ひにして十九の春の学窓のたつ

思わざるただけしさに草のおお盛りあがりくる風立ちし午後  
 風の音聞きいるわれかやつれたる面輪に向きてしずかなる時  
 かなしみの糸吐く虫のかくばかり露ふくむ子の声のただよい  
 はなびらの流れ入るよと告げきたるかの日窓辺に汝の立ちいき  
 こころ癒やす窓辺にただに眠れよとうすくれぬいの花吹雪する  
 ときおりを痛みするどく光りいる若やぐ色へ移らん樟の  
 コスモスの種おさな兒と蒔きしこと子の声蘇るねむらんとて

雨の日も朝顔は勢ひよくひらきはつかなる陽を吸ひこまむとす  
 母親のペディキュアと子の靴と色を揃へて戦後七十二年  
 私服にて逢ふ看護師はどこの人と思ひ出だすにしばらくの時  
 途中にて掃除をはれる箇所がありさうだあのとき電話が鳴つた  
 雨の止みを知らせくるのは蟬、小鳥そしてボールで遊ぶ子供ら  
 ひとつつつ思ひ出しては間に合ひて傷なく務むる団地の仕事  
 夕暮れに帰ってきたれば人影はなく手火花の匂ひ流れ来

竜巻の情報聞きて助けぬ吾落雷、雹の音たしかむる  
 逆落しに水が流れるこのあたり向日市全てが水に浸かるか  
 携帯の緊急竜巻情報に息をひそめて動きもならず  
 頑丈な建物に移れの情報に諦めにつつ夜の明けを待つ  
 白々と明け行く外を眺めつつ無理を言うなと怒りを発す  
 厄介な病と思うヘルニアにかかりし夫にわれ介護さる  
 気の進まぬショートステイに出掛けんか良き首尾願う夫の入院

## 菊地栄子 七千歩

楓の木に夕の明かりの点る頃小鳥の一羽声あげて呼ぶ  
 ビニールを編み込む揺り籠すてにして巢立ちゆきたる柿の葉の陰  
 目敏くも四つ葉のクローバー摘む日なり夕の茜がわが家をつつむ  
 嬉しくも小宮に添えきし梶子の花に掛けたる口無しの歌  
 信号に足止めされずに七千歩あゆみし今日の胸が透きゆく  
 低音を諾いたれどもながらに青きトマトは返品とする  
 信号に足止めされ居るウォーキング弾める息を平らかにしつ

## 草刈十郎 古戦場

更衣駅へと続く道を行く人らのすがた白き波なり  
 名前などなけれどわれの故里の新茶を来たる友にいれたり  
 矢尻や弾丸の飛び交ひたりし古戦場いまは静かに螢光れり  
 理解できぬままの法案蟻の群は共謀罪を疑はれざるや  
 落書の怪獣らしきものあまた大夕立の消してゆくなり  
 母の日にはみなで贈りものしたに誰も気付かず過ぎし父の日  
 闇ゆ来て闇に戻らぬ火取り虫団扇片手にわれはいら立つ

## 國井節子 稷粟

病む人の気分は秋の空に似て暗れのちくもり雷も鳴る  
 ひとつ家にわけの解らぬことを言ひ二人老いゆくくるしみの海  
 野の鹿も神鹿とても鹿は鹿あつさは暑し腹はべこべこ  
 殖えずすぎて飢ゑたる鹿の荒らしたる奈良の田畑は被害甚大  
 炎天下餌をさがして鹿のむれ日暮れの木下へつたり腹ばふ  
 花言葉「愛はらぬ想ひ」つゆ草の人知れず咲き空と溶けあふ  
 止め置きし車の屋根に小さな稷粟ふたつわらはべのこと

## 小泉泰清 歩む

ちちははより命さつかり恙なく八十五歳頃の緩みぬ  
 鳥のごと遠くへ行けぬ足弱に想ひばかりは山河を越ゆる  
 釈迦牟尼の覚醒により弘まれし教を胸に宿し清しむ  
 花散りて広葉があまた覆ひ合ふ蓮田の泥の光垣間見ゆ  
 をちこちを眺めながらに散歩する今宵は月に見つめられつ  
 炎天のしづもる夕べ風かすかあちこち眼を凝らして歩む  
 去年より水揚げ少なき初秋刀魚テレビは躍る銀鱗映す

## 河野繁子 流れる

きのご雲むくむく昇りし幼き日夕にはすすけた人通りたり  
 栗のいが青きころがるこの時季に歌会なしし 遠き顔ふれ  
 稲のなか神ぬき出でて種こぼすかかわりなけれど心の痛む  
 打ち水に降りて水のむ揚羽蝶かわくころに触れて止まる  
 水曜日郵便物は隣のみヒターンするバイクの音は  
 手を掛けぬ田におもだかの花盛りいらぬ気苦勞背負いてしまふ  
 おもだかの花に罪なし三弁の白き花咲く夏たのしまん

## 小西美智子 同窓会

待ちあわす聖橋口たたずめる高き人影かつての生徒  
 十八歳の春に別れて会いたるに男子は立派な男性となり  
 四十二年の月日をこえて会いたるも昨日のつづきのごとく話せり  
 高槻を離れ東京に住めるもの十数人がつどう楽しさ  
 いたずらもいまは笑いの種となり同窓会の席をなごます  
 中庭で行なわれたる入学式曇天の日に話は及ぶ  
 新設校でありし学舎廃校となれるも生徒は一期生なり

## 小林能子 縁起

・羊

片瀬諏訪神社の神輿浜降りを見しは戦後も二年を経て  
波をきり神輿降りゆくこの浜に父は齒固め石を拾へり  
藤沢の猫も「踊り場」で踊りけむ遊行寺サーカスの噂などして  
「天王様は泣く子がきらひ」夕空に護符の舞へばわたしも泣くまい  
過去帳は要らぬ仏壇は小さくとぞ君に圓かなる戒名授かる  
駆け出す子らのしるべに寺の縁起源頼朝伝説の松  
お施餓鬼を終へ鎌倉へ江ノ電で眠りこけし子は膝に重たく

## 小山宜子

こほろぎ

・詩

生き甲斐の何一つ無きホームの日暮るるか斜光が窓を透きて射す  
むらさきの紫御殿の葉のひまに桃色の花ひつそりと咲く  
にはたつみ耀りつつ雨上がる庭くまに燃え尽きんとしてカンナ咲く  
逝く夏を個室の名札ひそやかに剥がされぬ笑顔の小野さん逝きぬ  
姥捨の園を彩る花花はをみな介護士の心遣りなり  
今年の夏過ぎゆくらしも若き日の短歌への熱意いつ失ひたるや  
さやさやと玻璃戸のすきま洩るる風わが胸裡にこほろぎは鳴く

## 近藤栄昭

安積山

・福

滝という小字の軒は風の道唐黍下がりつぶつぶ光る  
山近く寄り合い建てる一軒に市議選ポスター競いを知らず  
カラタチのうぶ毛の熟れる村はずれ山裾までの刈田道ゆく  
山裾の棚田をすぎて木木に入る隠していたり急登の山肌  
梢揺れ一葉ゆれ揺れ舞い來たる重く受けるかひらりかわすか  
風に揺れ千切れた紅葉の空に飛ぶ呆と見ているどうしようもない  
山頂に二人立ちいる安積山ただ寄り難く遠山を見る

## 近藤芳仙 彩

・信

彼の夫に児をいだかせて前をゆく若き母はも自信に満ちて  
夕陽うけあをく萌えたつはうき草くれゆく畑の象徴となる  
かたかこのひろぐる山路にひさまつき接写するときその蕊を見き  
一冊の本舞つてくるメール便昨日さがして入力せしが  
娘のくれしフェイスバックの「紅だゆう」貼りて一人の夜は紅  
鉛筆の芯はこんなにははきかと思ふ夕への早暮れをむる  
前をゆく車のナンバー7216に我が染まりある彩さがしみる

## 坂上直美

京の夏

・天

我こそは蘇民将来子孫なり粽を替うる祇園会の夏  
我が門に牧下の鉾の粽あり蘇民将来子孫の徴  
くずきりは黒蜜がよし京の夏鍵善良房奥の一席  
何必館街のざわめき届かざる小さきビルに魯山人見る  
カワトンボ我らの宴に侍りけり瀬音涼しき貴船川床  
山上の風に吹かるる父母の墓久しく訪わず草長からん  
消ゆるまで飽かず眺むる大文字父母無事に帰りゆきませ

## 坂出裕子

梅

・洛

梅の実の紅く染まるを確かめてひとめぐりさす瓶を日毎に  
待つことの少なくなりしこの日ごろ土用待ちをり梅を干さむと  
夕焼けの美しきに見とれ立ち尽くす時をいたたく長く生き来て  
くれなるのルビーと光る太陽の沈むを送る今日も無事なり  
真つ黒の日焼け歎けば焼けるほど歩ける幸と子にさとさるる  
もう限度もう限界と思ひつつ熱暑の坂を休まずのぼる  
雨あとの草抜きやすしうつつむきて草抜く時にこころやすらふ

佐久間 晟

日乗(五)

・湾

振り返るわが人生に疲れたり疲れしゆえに憂鬱なのかも  
水のごとく流されて来しわが人生思えば何を為すすべもなく  
午前三時起床、この習慣に慣らされて定まらぬ心音の続きし六十年  
思わざる明るさゆえに雨を弾き美しく咲く花を見落とししかも  
橋ひとつ越えれば彼岸と知りつつも行きたくはなし現世がよろし  
もう何も出来なくせにと責めたてる幽霊みたいな声が聞こえる  
振り替えば登山の思いわが人生自らの脚で歩き来しのみ

佐藤 道子

老い

・甲

細文の山里吹きゆく夏の風眠つむれば昔の昔  
朝よりしげく奏でる虫の声私の生れも山里なりき

シナプスのすぐつながらず「何の事？」おそき返事はボケの始まり  
ししうどの名を思い出し「大丈夫大丈夫」と子にほめられてをり  
今置きしナイフの置場すぐ忘れ遠くをさがせば目の前にあり  
日常の些事のみとなるわが短歌若き昔の詩情なつかし  
長生きは只それのみで偉大だと哀草果師は笑みて言ひにき

椎名 恒治

手紙

・橋

突然に出できたりし昭和五十三年十月十二日金子一秋の文  
字が読めぬゆゑ「一本の木」家人に読んでもらっていますと大きな文字  
〈異風にして厚味ある本なり〉と論客金子一秋の誉めことは  
片山君の解説文圧巻なり「伝片山椎名戦中記」とも読めます  
大兄の通つた戦中戦後は小生も通つた道であり懐かしい思ひがします  
曾て私は河内八尾にくらして京橋や鶴橋など憩ひの拠り所でした  
読み終り横浜港の消印しげしげと見る50円切手の弥勒観音像

鈴木 結志

惑う核のごみ

・福

核のごみ何れ処分はできるとう見切り発車を原発に問う  
深層の核のごみ処理A-Iを論ずれば手に手だてはなきか  
核のごみ処分地選ぶ科学的特性マップ国が公表  
二十年ほど時かけて核のごみ処理場候補地しほりゆくらし  
核ごみ処理受託自治体適否かの調査補助金年十億円とう  
高レベル核ごみ二万五千本更にふえゆく野ざらしなるや  
トイレなきマンションに等しと批判する核のごみ処理地の見当たらず

世木田照比古

盆踊り

・茜

夏休みは妻に従いスーパーのカーットの運転うまくなりたり  
トランプのマスクを被り手を振りて仮装大会の小さき大統領  
ピコ太郎とトランプマスクが大人気仮装大会で孫が駆け寄る  
盆踊りの寄付者の張紙書きゆけば炭鉱節のごと文字が踊りぬ  
満員電車に立ちいてすべなし後頭に年齢などを量りいる  
公園の清掃の手を助くこと勢いもちて油蟬鳴く  
遠き森の鶯の声明けきらず墓地に吹く風世俗とならず

関根 榮子

農道

・埜

穂孕みの稲田を渡りくる風に陸橋の上に立ち止まりたる  
清々と茗荷を茂らせ古き農家一軒ありて道通りたり  
この角の自動精米機は残りしが玉子の自販機なくなりて  
眼科へと通う折りふしいつよりか近道知りて農道えらぶ  
農道をふた曲りして御社の満開の桜に会いしはこの春  
伸びきりし蓬に囲まれ白々と茅花も咲けり舗装の絶えて  
一年をかけて雑草二百種を採集したりし故高沢氏

関根和美

熊と腦

・埵

寝入りばなふと過りたる一行の不安に起き出す目をこすりつつ  
 年号と人名の誤まり避けたきと史料を広げまた照合す  
 誰が言いし名言なるや口ずさみ「たかが校正されど校正」  
 賢さにある日驚きおろかとも今日は笑いぬ パソコンの腦  
 書きあげてのちのひと月ねかせてはまた取り出すも明日までとせむ  
 肖像権著作権ありわずかなる料金請求などといろいろ  
 されどわが心傾けありし日々在りし人々ここにおさむる

高尾恭子

山陰

・大

泣かしたり苛められたり遠き日を秘めおりトンボのちびた鉛筆  
 夏帽子いくつ失くした あら草の細道つんつんかきわけし日々  
 骨相の様変わりした歳月を「眼鏡かえた？」とさらりとかわす  
 三瓶山のなだり半ばの麦わら帽どこかの少女がうしなつた夏  
 鴻ノ池の姫君なれど銀髪の元氣印や旅のみちづれ  
 一両の列車の揺れに胸そこを汽笛ひびけり霧の山峡  
 鴨山はここぞ否とぞ少年のように茂吉の足跡たどる

高津砂千子

応援歌

・風

たれか言う「あつ半月が」背を伸ばし夕空仰げば月レモン色  
 梅が枝にぶらりと下がるヘチマの実日にけに太りゆくを見守る  
 春慶塗の弁当箱に菜詰めるひとりの昼餉たかにすべく  
 応援歌と思ひ嘯みしむ友のうた暑さきびしき夕への庭に  
 打掲げる花火のとどろき耳にしてパジャマ縫いゆく仕上げの近き  
 この年になればわかると常言いし姑のおもわる七十路こえて  
 ふたたびの生あるならば野に咲ける黄のたんぼぼになりたきものを

高橋和代

光まし来る

・枕

半月も光ましまして球体となり侘しきわれにもパワーを放つ  
 月詠むと縁に居据る辺に夫の付き合ひくれしたまさかなるも  
 独り居となりて早ばや閉ざすゆ糸月の満つるを篤と見ざりし  
 庭に立てば即寄りて来し蚊の居らぬこの世の自然いかになりゆく  
 ひぐらしの声に来る冬怖れ来し幼き日より病弱にして  
 長病めば心も清かとは遠く来る日ただただ送りぬるのみ  
 思ひ見るこの身の果つる日の周囲交はりは無けむ近からむとて

竹下妙子

天の川

・霧

小夜ふけて煙らふごとく浮かぶ川天の川とはさびしき川か  
 つきあぐる昂ぶり抑へ寄る窓に闇を斜めに星が流るる  
 刻ごとく霧うごきつつ里川の淡き月影削つてゆきたり  
 川底に映るあまたの星のありきらめきて散る稚魚の群見つ  
 里川を横切る風の道ありて風渡るとき水光りけり  
 雷くればひぐらしの声ひそめけり風荒ぶ夜のほの白き闇  
 夜の更けてなほ鳴く蟬の重たさを背に受けて聞く今日の終りに

田土成彦

弥陀

・宙

どこからか月光仮面が現れるこのタイムリングがたまらなくウソ  
 永観や遅しと振り向く弥陀の声あるひはわれにかくるこゑかも  
 ボイジャーがカイパーベルと過ぎてゆく何億年の旅のはじめに  
 七月の汗が鳩尾のあたりに落ち男でありし時すぎゆかむ  
 時折に妻が階下に立つるおと無事生存の信号と聞く  
 ひと生まるまた火の止まる役増えて和歌の神様だけで居られず  
 人麻呂の本名は猿あり得べきこととして読む『水底の歌』

## 田土才惠

地蔵盆

宙

モルモットの命ふたつを守りつつ留守居の部屋に風通しおく  
エプロンを掛けてきりりと立つ厨給筆に迷いし時を置ききて  
孫六人揃えばなおも暑さ増す夏休み来ぬじいじの家に  
すこやかを当然のごとわが背越す未熟児のかけみじんも見せず  
地蔵盆夏巡り来てよだれかけ赤きを縫えり祈り込めつつ  
地蔵盆のお下がりの菓子重ねおく幼き者の近く住まねば  
白き皿に落ちてかわきし音返すあられ一粒ひとつぶのこえ

## 虎谷信子

盆・前後

伴

一本の線香くゆらし 道還る。お精霊しよんさんに水向供養  
盆の日日 三度の供物お給事よ。いささか手抜きでこめんかうむる  
盆提灯つるし 華やく縁に坐て、水かけらふの移らふ しじま  
京五山のおくり灯 共に仰ぎしか。先立ちし妹よ、今宵は願ちませ  
潮満ち来 汀に居並ぶ六体の、ハラホゲ地蔵訪ひし香き日  
夏建具にかへし家内 風通る。高校野球に ひとりはしやく  
風鈴の音色 騒音とがむとか、世の中何かが さびれゆくかな

## 中島央子

この町

森

白秋の旧居の跡にのこる歌碑「乾草小屋の桃色の月」

江戸川の岸辺の寺に六百年千手のやうな影向うかげむかの松

踰居する栞錦の像は五十年駅のコンコース睨みをきかす

成田・羽田・デイズニールランドへ送迎のバス発着の駅前広場

呉服店がスーパールになりそしてマンション高層見上ぐる駅前通り

通ひなれし駅前広場の大楠に雀色時 三部合唱

代々を続きし家がたはやすく毀されたちまちワンルーム・ハウス

## 中島義雄

処暑

岡

かんかんと竹伐る音の響きゐてひたすら暑き処暑の午後なり  
信じ合ふ心得たりや夕庭に二羽の小鳥が啣くは合はせめる  
理髪店の回転灯の下出でて人赦すころなほ捻れ合ふ  
いつまでも挽歌詠むなど友よりの電話切れたり妻の百ヶ日  
マトンの肉焼けしと皿に盛り呉る子よおろそかに我は死なぬぞ  
雑誌社の寄稿依頼を断りしは愚なりや納豆を椀に掻きつつ  
また減りし体重計を睨みつつ活断層のずれを思へり

## 萩葉子

日傘

銀

踝がかすかに疼く雨模様 子供たちの声誰か呼んでる  
「ひらがなで話して下さい」歌会にて思わずいった二十代のわたし  
買い物の品のひとつを告げてから靴を履く夕の風を聴きたく  
虫めがね近付ければギロリ振り向きぬ蟻は白い何かくわえて  
暑い日は熱い茶を飲む娘とふたり夫は庭のジュウヤク煎じる  
庭にくる鳥は避暑地に行ったのか虫の声のみ昼も夜も  
外出はブラウス羽織り傘の中三度はちがうとすすめられた日傘

## 白子れい

耐えきて今

洛

ひと気なき早朝のみち皮膚細胞全開となす蟬なかなぬいま  
あさ朝を欠かせぬものはヨーグルト林檎とバナナわれを支うる  
六歳まで母乳離さぬ吾のためバナナと牛乳準備されいし  
台湾の祖母より贈られ来るバナナ幼き吾の日々の楽しみ  
召集うけ台湾より来て入隊まで共に過ごしし叔父も戦死す  
ゲンゲンとバナナ送りてくれし祖父母まみゆるなくて台湾に逝く  
彼の日より満州事変・支那事変・大東亞戦耐えきて今あり

ばばりようこ      なお美さん、ああ      ・鹿

檜垣美保子      祈り      ・昴

沈痛なる声で「悲しいお知らせが……」刹那ことを失う程の衝撃  
八月の七日運転中くも膜下出血により脳死の悲報を  
ぬかずきて神に乞い願う君がお命「奇跡とう恩恵をいだけかせ給え」と  
この一年あいつぎ逝かれし夫君と母上に「どうか連れに來ないで」とも  
なお美さん聴こえましたか耳近く蘇りませとひたなる一首が  
されどされどぬぎめのあらなき君がため喪の色をまとう葉月となりぬ  
遣しゆく父上にうしろ髪曳かれつつふり返りふり返り逝かれしならん

浜谷久子      福島      ・地

福田庸子      再訪檜枝岐      ・今

福島に会いに來ました六年後大震災は過去とはならず  
「・研究会」部外者参加も拒まれず三日の行程一席占める  
訪問はどんな形と模索して信頼の手引きに福島に発つ  
被災後の深まるばかりの傷と痛み撮り続けいる大石芳野氏  
一ヶ月は福島を撮り一ヶ月は体調癒やし写真家業をと  
被災後を名を刻みつつ写真撮る繋がる心を礎として  
報道はシナリオありきと被災びとは無いままの道進むほかなく

丈高き草原となる田の跡の広がりゆきし時の重たく  
木道の尽きし山かけせせらぎに夕べ河鹿の声とけてゆく  
国道にそひてガレージ作りたる雪の暮らしの村人の知恵  
橋場のばんば様被る木椀の数増してこの頃多く訪ねたり  
藁葺の集落ありし丘の辺をさぐる眼にみどりは重し  
鳥の声もどりきたればゆるらかに遠のきゆけり山の雷  
飛びたてぬ子を見守りて見限りぬ鶴の選択見事なりけり

浜本美美      パンの耳      ・夢

藤川和子      ミサイル      ・眉

み仏の灯となるとう鬼灯を今年も活けて盂蘭盆迎える  
香りたつ二女茶を二つの湯呑みへとつき分けている朝のならわし  
うたが生まれぬ詠めないといと嘆くこえ情動の波小さくなりつつ  
花ひとつあらぬあしたの玄関先今朝また鴉の羽根落としゆく  
静脈の浮きて醜き手の甲よこの手につかみし如何ほどの倅  
百日紅ゆったり揺れおり渡りゆく晩夏の風をくれないに染め  
貧困の国の子ゴミを漁る映像頭ちたりパンの耳おとすと

忽然とそのときはきて石の上に線香花火の火のしづく落つ  
おとうとの鼻梁こそよりくつきりときわだちみゆる九月初めく  
冷蔵庫の卵の位置に冷やしたる目薬を夜更けにさして星みん  
祈るほかなければきょうの神だのみ夫の写真につぶやいている  
ポケットに持ちかえりたる貝がらの波に研がれて白よりしろく  
二人居てもひとりとしずかに言い残しいとま告げしは顔のなき人  
朝の日が海にひかりの道を敷きどどこかにあるかもしれぬ海坂

ミサイルは太平洋に着弾す初Jアラートにをのく日本

藤田美智子

ひまはり

・新

教育費ただです村に戻ってきてください 休耕田に揺れるひまはり  
歌はねば歌へよいつまで歌つてる身のうちに鳴く蝉のごときが  
原子炉の中に息絶えしロボットは生前サソリといふ名を持ってり  
居酒屋の臭ひが苦手と子は喚く人間が嫌ひなわけぢやないのに  
どのやうな人が名づけしやトランプの遊びに(神經衰弱)などと  
孫あらばこの児等の歳に近からむわがままな言ひ分最後まで聞く  
葉はたうに枯れてもすつくと立ちぬる向日葵の列に夏が残れり

船田清子

晩夏

・天

盆過ぎを目覚し蝉の声たたず落ち蝉の背路上に焼かる  
虫の音の立秋を期して高まるを樂しみしは速き昔語りや  
孟蘭盆におとなふ虫のひとつなく救急車のみ暑き夜を裂く  
行く夏の生駒山中松虫の音に囲まれし 半世紀前  
おぞましきヒアリの進入ならずして樹上にすがしき青松虫なら  
雨・日照り夏の列島二分して生鮮食品高騰やまず  
みつみづと桃のかをりが誘ひくる「今日のみ」とひとつ汝が仏前へ

久我田鶴子

悼・本木定子

・羊

十月号校正しつつ声を挙ぐ 八月五日、本木さん逝く  
声に出しその死が事実に変はりゆく速さかなしも歌を讀みあく  
原稿の届かざりしを(死)とまでは思はざりしよ本木さん嗚呼  
一首書きあとは誰かにゆだねたる六首の稿が最後となりぬ  
麦秋も稲田も見たいと詠ひるき見られぬままに伏してをりしか  
「暑いので雪景色などどうでしょう」はがきの消印7・13大河原  
それ程の病気でもない、地中海たのしみにしてゐると最後のはがき

## ●地中海叢書・新刊案内●

●若松喜子歌集『砂嘴のソクラテス』(地中海叢書第906篇)

ながらみ書房 二六〇〇円(税別)

●西堤啓子歌集『カビバラを抱く』(地中海叢書第907篇)

砂子屋書房 三〇〇〇円(税別)

●成田一子歌集『雲の曇茶羅』(地中海叢書第908篇)

砂子屋書房 二五〇〇円(税別)

\* 著作権継承者：菊地順子

●浜田昭則歌集『暗黒物質』(地中海叢書第909篇)

青磁社 二五〇〇円(税別)

\* 問い合わせ先：浜田恭江

## ●地中海叢書◇近刊案内●

●関根和美著『記憶する丘』(京成社)

●永塚節子歌集『かえるっぱ』(九曜書林)

●桃原邑子歌集『沖繩 〈新装版〉』(六花書林)

「死ぬまで続ける」と言った言葉どおり、沖繩をうたい続けた  
桃原邑子。歌集『沖繩』は、昭和61年に出版された第三歌集で、  
七〇〇部がたちまち品切れになったそうです。その後、読もう  
にもなかなか読めない状態になっていましたが、新たに編集し  
直した遺歌集『桃原―沖繩Ⅱ』と合わせて、コンパクトでイン  
パクトのある新装版として出版することにしました。来年は、  
桃原邑子没後二十年。沖繩への思いのみならず、さらにそこを  
超えて訴えてくるものがある必読の書。今だからこそ読んで  
ほしい一冊です。詳細はまた……